

— 産業界と学術・研究機関を結ぶ —

News
Letter

2022年10月
Vol. 08

かけはし

特 別 対 談



関西健康・医療学術連絡会 理事長

建築家

橋本 信夫 × 安藤 忠雄

一人ひとりが責任を持って 自らの健康を考える社会に

2022年度に入って半年がすぎた。COVID-19をめぐる状況はいまだ予断を許さないが、
私たちの社会は新たな時代へ向けて歩みを進めている。

今回のニュースレター「かけはし」の特別企画として、世界的な建築家の安藤忠雄氏と
関西健康・医療学術連絡会の橋本信夫理事長による対談が実現した。

お二人は専門領域は違えど、互いに肝胆相照らす仲。二人の話題は医学、医療にとどまらず、
分野の垣根を越えて縦横に語り合った内容をお伝えする。

Profile

建築家

安藤 忠雄 (あんどう・ただお)

1941年大阪生まれ。独学で建築を学び、1969年安藤忠雄建築研究所設立。代表作に「光の教会」「ピューリッツァー美術館」「地中美術館」など。1979年「住吉の長屋」で日本建築学会賞、1993年日本芸術院賞、1995年プリツカー賞、2003年文化功労者、2005年国際建築家連合(UIA)ゴールドメダル、2010年ジョン・F・ケネディーセンター芸術金賞、後藤新平賞、文化勲章、2013年フランス芸術文化勲章(コマンドゥール)、2015年イタリア共和国功労勲章グランデ・ウフィチャーレ章、2016年イサム・ノグチ賞など受賞多数。1991年ニューヨーク近代美術館、1993年パリのポンピドー・センターにて個展開催。イェール、コロンビア、ハーバード大学の客員教授歴任。1997年から東京大学教授、現在、名誉教授。



命と向き合う医療者の責任感

——2年半以上にわたるコロナ禍において、
医療者の方々のご苦労は想像を絶するものかと思います。
安藤先生はどのようにご覧になっていますでしょうか。

安藤●今般のコロナ禍で、医師や看護師をはじめ医療に携わる方々の姿には本当に感銘を受けています。時には何日も家に帰らず、自分のことは後回しにして、文字通り命がけでご尽力されているのです。医療者の方々の、あの責任感、使命感は一体どこから出てくるのか。近ごろの日本は責任感の薄い社会になっていますが、多くの人々が失ってしまったものを思い出させてくれました。そのあたりを私たちはもっと考えるべきだと思います。

橋本●まず、はじめに述べておきたいのは、もうポスト・コロナとかウィズ・コロナといった考え方そのものが意味を失いつつあるのではないかということです。コロナ禍が続いていようが終息しようが、今この時に私たち自身が何をなすべきかという視点に立ち戻るべきでしょう。

さて、安藤さんから私たち医療者に向けて大変な励ましのお言葉をいただきました。安藤さんは今回のコロナ禍で、まだ初期のころに医療者を支援するファンドの設立を提唱され、安藤ご夫妻からも多額のご寄付をいただいています。お金だけではなく、多くの人々が応援してくれているという力強いメッセージが、医療者にとって大きな勇気になりました。コロナ禍ではたくさんの苦しいこと、つらいことがあり、くじけそうになったときでも、その応援が支えになりました。

そして、このような支援にあたって安藤さんは「できるだけ自分の名前は出さないでほしい」とおっしゃっていたのです。安藤さんは、以前から自然災害の被災地などを支援する活動に力を入られています。コロナ禍では医療者に向けて本当に熱心なサポートをいただきました。

安藤●先ほど申し上げた通り、医療者の方々の働きぶりは本当にすごい。しかし、それだけで健康な社会がやってくるとは思いません。私たち市民一人ひとりが自分の健康について真剣に

考えなければならないのです。そこで、医療者を支援することがその契機になればと考え、ファンドの設立を提唱しました。すると、多くの方々から趣旨にご賛同をいただき、たくさんの寄付が集まりました。

今や人生100年の時代です。一人ひとりの市民が自分の健康に責任を持たなければならないのですが、残念ながら真剣に考えている人は少ない。自分の身体のことなのに、思い通りにならないと病院に文句をいう患者もいます。ここまでは自分が我慢しなければならない、という範囲を分かっていないのです。今は文句をいう人が強い時代で、残念なことです。

これまでに私はがんで大手術を2回経験して、十二指腸や膵臓など五つの臓器を摘出しました。それからは、お医者さんにいわれたことをきっちり守っています。食事は40分かけて、しっかり噛んで食べる。病院の食事はおいしくないが、それでも残さず食べる。内臓がないなら、ないなりに生きるしかありません。ところが、勝手に自分の好きな食べ物を持ってくる患者もいます。

消化器を取ってしまったのだから、ものを食べておいしいわけがないのに、それを受け入れられないのでしょうか。

私は今でもお医者さん、看護師さんにいわれた通り1日1万歩を歩き、昼食の後は1時間ほど休憩するようにしています。ただ、お医者さんは私たちに40分かけてしっかり食事するよういっているのに、自分はあまりに忙しくて10分ぐらいでコンビニ弁当を食べたりしているようですが(笑)。

コロナ禍で見えてきた日本の姿

——依然として医療の現場ではCOVID-19が大きな課題ですが、現時点でどのようなことがいえますか。

橋本 ● コロナ禍では、日本の医療をめぐる多くの問題が指摘されました。もちろん批判は真摯に受け止めなければなりません

が、ちょっと悪いところばかりを強調しすぎていないか気になります。日本は人口あたりの死者数などをアメリカやヨーロッパの先進国と比べてもかなり小さく抑えています。国民皆保険をはじめ、日本の医療には良いところがたくさんあるのです。日本ほど誰もが医療にアクセスしやすい国は少ないでしょう。日本の悪いところを意識するあまり、良いところをつぶしてしまっは意味がありません。

もっとも、このコロナ禍が前例のない出来事のようにいわれることもありますが、それは違います。今までに経験してきたはずのことを、改善せず反省もなく繰り返してしまった面があります。例えば保健所のあり方や検疫の強化、PCR検査の充実といった問題は、実は2009年の新型インフルエンザで指摘されていたことです。それを、喉元すぎれば熱さを忘れて、置きっぱなしにしていたのです。今度こそ、嵐が去ったらもとに戻ってしまうのではなく、同じ過ちを繰り返さないよう、この経験を糧にしなければなりません。

コロナ禍で医療者が一番つらかったのは、命の選別を迫られるような状況に陥ったことです。医療機関の限界を超える感染者が発生する状況で、どの患者を入院させるか、一方どの患者を入院させないか、決めなければならない場面がありました。それが最も医療者の心をくじき、耐えきれずに辞めてしまった人もいます。ですから、今後は絶対にそのような事態を起こしてはならないと心に刻みました。

安藤 ● 私がコロナ禍を通じて感じたのは、責任を持って決断を下すリーダーの不在です。自分の考えをしっかり示して、反対意見があっても方向性をきちんと決めるリーダーが、政治の世界を含めて今の日本には見当たりません。ですから、ものごとがなかなか前へ進まない。社会がどこへ向かっているのか分からず、私たち市民は右往左往するしかありません。

また、コロナ禍に限ったことではありませんが、役所にたくさんある委員会や審議会なども問題ですね。私も以前いくつか出席したことがありますが、腹を割って本気で議論することはなく、官僚がシナリオを書いた出来レースです。役所が選んだ偉い先生方が集まって「異議なし」で終わるケースが多い。日本社会の構造でしょうけど、私は行くのをやめました。



Profile

関西健康・医療学術連絡会 理事長
橋本 信夫 (はしもと・のぶお)
 地方独立行政法人神戸市民病院機構理事長。1973年京都大学医学部卒業。京都大学大学院医学研究科教授、国立循環器病センター総長、国立循環器病研究センター理事長などを歴任し、2017年4月より現職。医学博士。世界脳神経外科学会連盟(WFNS)名誉会長。1980年日本脳卒中学会草野賞、2004年美原賞、2005年William Beecher Scoville Prize (WFNS)、2006年日本脳神経外科学会齋藤真賞、2009年井村臨床研究賞、2017年日本脳神経外科学会佐野圭司賞。専門は脳神経外科。

人生100年時代の「青いりんご」

——安藤先生が人生100年の時代とおっしゃったように、
これからは健康長寿がますます重要になってきますね。

安藤●人間が100歳まで生きるには、健康はもちろん、夢と希望が大切です。アメリカの詩人、サミュエル・ウルマンは、青春とは20代や30代といった人生の期間を示す言葉ではない、何歳であっても夢や希望を持っていれば青春なのだと述べました。70代、80代になっても、それまでに自分のベースになるものを見つけていれば、目標を持って生きることができる。建物も同じです。見えないところにあるベースが一番大事なのです。それがしっかりしていれば大概のことがあつ



「青いりんご」

兵庫県立美術館(神戸市中央区)の屋外スペースにある高さ2.5メートルのオブジェ「青いりんご」。アメリカの詩人、サミュエル・ウルマンの「青春の詩」から着想を得て、安藤忠雄氏がデザインした。安藤氏は「目指すは甘く実った赤りんごではない。未熟で酸っぱくとも明日への希望に満ちあふれた青りんごの精神だ」としている。

ても倒れません。そういった精神の象徴として兵庫県立美術館に「青いりんご」のオブジェをつくりました。

しかし、現実はどうでしょうか。私は時々この近くのスポーツジムに行くのですが、60代で定年になった男性たちがたくさん来ていて、ずっとそこにいます。聞けば、家に帰ると奥さんがうるさいから行くところがないそうです。40代、50代で仕事ばかりしていて、もう家族とコミュニケーションがないのです。

私は高層マンションに住んでいますが、ほかの住民の顔も知りません。先日ボヤ騒ぎがあって、みんな一斉に避難しました。すると、そんな非常事態になって

初めて住人同士が会話して、コミュニケーションが生まれました。マンションという立派なハコはあっても、地域社会はなかったのです。

せっかく人生100年時代になるのですから、大切に生きたいものです。そのためには、まず一人ひとりが自分の健康に責任を持つこと、次に家族と地域社会です。しかし、いずれも現代の日本人には欠けていることが多いようです。

橋本●そうかもしれません。一般的に、高層マンションでは上層階ほど裕福な人が住んでいますが、ほかの住人と交流する機会が一番少ないので最も孤独に陥りやすく、結果として早く認知症になりがちだという指摘もあるようです。

安藤●日本の住宅は、マンションも戸建ても、みんな同じかたちをしています。パリなどに行くと、建物も北向きだったり南向きだったり、いろいろ個性があります。日本人も、それぞれの個性をもっと大事にするべきだといいたいですね。

橋本●横並びと同調圧力は日本社会の特徴なのでしょう。自分だけが周りとは違うことをやりにくい雰囲気があります。それがコロナ禍では良いほうに働いた面もあったといわれますが、均一になりすぎているのが心配なこともあります。

そのひとつは教育です。日本の子供は周りのみんなと同じであることが求められ、親も横並びを重視する傾向が大きいので、それが自然と身につけてしまっている。多様性が小さいのです。医師の場合、医学部を受験して、卒業後も専門医制度などがあって、均一なレベルの医師を育てる仕組みになっています。それは大切なことではありますが、もうちょっと個性を出せるようにしても良いのではないかと感じます。医師の仕事は人間が相手ですから、いろいろな人と向き合うことになるわけで、多様性への理解は不可欠なのです。

以前、京都大学医学部の入試で面接をしたことがあって、たまたま4人連続である有名進学校の生徒がやってきました。こちらが質問すると、みんな立て板に水のようにしゃべる。ところが、ふと「シュヴァイツァーを知っていますか」と聞くと、4人とも知らなかったのです。想定される質問の対策は万全だったのですが、ちょっと残念な気持ちになりました。

安藤●京都といえば、千年の都です。京都の大学へ進めば、勉強だけでなくさまざまな美意識も学べますね。寺社仏閣がすばらしいとか、琵琶湖疎水がきれいだとか、京都の自然も魅力があると、いろんな好奇心がわいてくる。そうすると、人間の幅も広がるのではないのでしょうか。

積極的なコミュニケーションを

——お話は尽きませんが、これから私たちが歩いていく
未来への道すじについて、最後にひと言ずつお願いします。

安藤●今日は、命と向き合っている医療者の方々の責任感について触れました。この地球上には、ほかにもいろいろな人がいます。芸術家がいる、会社員がいる、学校の先生がいる、平均的な人もいるし、少し変わった人もいます。同じような人ばかりでなく、みんな違うことが大事です。それぞれが自分のなすべきことに責任を持って、互いに助け合えば良いのです。何より、一人ひとりが自分の健康に責任を持つことは、その第一歩だと思っています。

橋本●安藤さんからたくさんの示唆に富んだお話をいただき、これから私たちが進むべき方向が何となく見えてきたような気がします。関西健康・医療学術連絡会としては、産官学が連携して健康長寿社会の実現に貢献するため、とにかくコミュニケーションが重要だと考えています。さまざまなセミナーやシンポジウムなどの機会を通じて、できるだけ多くの人々の意見を聞き、そして私たちからも発信していきたいと思えます。

(2022年8月31日、大阪市北区の安藤忠雄建築研究所にて)



「まさかの時のID連携～ 命を守る健康・医療データを活かすために」

南海トラフ巨大地震のような大規模災害が発生すれば、広域での救急搬送や避難所を含む医療現場などで、すぐさま患者の既往症や治療歴といった健康・医療データが必要となる。しかし、個人を認証してデータにアクセスする仕組みづくりは万全といたがたいのが現状だ。「まさかの時」に備え、健康・医療についてのID連携を関西広域で進めることは、喫緊の課題といえる。そこで、関西健康・医療創生会議と関西健康・医療学術連絡会は2022年3月、ID連携をめぐるさまざまな課題を再確認し、優れた先進事例について知るために、「まさかの時のID連携～命を守る健康・医療データを活かすために」と題したオンライン・シンポジウムを開催した。

データ基盤創出のカギは 信頼性の確立とサービスの充実

プログラムの冒頭、京都大学大学院医学研究科の黒田知宏教授が、災害時に活用できる健康・医療データ基盤の創出に向けて問題提起を行った。「ID連携を含む医療DXとは、医療者や患者、疫学やAIの研究者、システム担当者など、すべての関係者にとって価値あるものでなければならぬ」と強調。「いかにトラスト(信頼)を確立するか」と「どのようなサービスを提供できるか」がカギとなることを指摘した。

また、デジタル化の先進国であるフィンランドやエストニアの事例を紹介し、トラストとサービスが重視されていることを説明。日本でも、大学の研究者や学生などが利用できる認証システム「学認」が運用されており、参考にすべきだと述べた。さらに、ID連携の具体例として、災害医療の現場で意識のない患者のポケットに入っていたクレジットカードの情報をもとに保険者が持っているレセプトへアクセスする仕組みがあれば、速やかに医療サービスを提供できるといったアイデアを示した。

次に、ID連携に関係する2人の専門家が特別講演。1人目として、神戸市立医療センター中央市民病院救急科の松岡由典副医長(肩書は当時)が「広域救急・災害現場における医療の課題」をテーマに登壇した。

松岡副医長は、これまで災害医療で運用されてきた情報共有システムや標準カルテなどについて説明したうえで、現状の課題を指摘。「意識のない患者が搬送されてきた場合

など、当初は氏名や年齢すら確認できないことがある。住所地とみられる自治体に問い合わせ、通院先が分かれば情報提供を依頼するなど、医療以外の作業にかなりの時間と労力を割かれる。相手側にとっても負担となる」と述べた。

さらに、現場で必要となる医療情報として、本人の病歴や投薬内容、採血データ、過去の検査所見などを挙げ、「それらはレセプトや電子カルテ、DPC(診断群分類包括評価)のデータなどにそれぞれ格納されており、それらを紐づけすることが望まれる」と具体的に要望した。

特別講演の2人目となる京都大学情報環境機構の中村素典教授は、「学術認証フェデレーション『学認』～学術を中心とした国内外におけるID連携の取り組み～」について解説。近年、それぞれの大学や研究機関で多くのシステムから個別にIDやパスワードが発行されて煩雑さが増しており、それを解消するためひとつのIDとパスワードでさまざまなシステムが利用できる「学認」がスタートしたことを説明した。

中村教授は、「学認」は学外からの利用や他大学などへのアクセスも可能で、個々のサービスから認証の処理を独立させる「SSO(シングル・サイン・オン)」を導入することで、「ワンストップ認証」が可能となっていることを指摘。その要諦は「認証(いかに本人確認を行うか)」と「認可(どのような利用の権限を与えるか)」の分離にあることを強調した。

そのうえで、SSOではサービス提供者にパスワードを知られず、セキュリティ面でもメリットがあることに言及。「今後、対象を民間の研究者に広げ、携帯電話事業者やGoogleなどの企業とも連携し、より多くの人々が共通の仕組みを利用できるようにしたい」と展望を語った。

続く一般講演では、「先進事例に学ぶトラストアンカーの

実際」として、地方自治体の実務に携わる2人の担当者が登壇した。大阪府吹田市健康医療審議監の岡大蔵氏は、吹田市内に立地する北大阪健康医療都市「健都」を中心とした取り組みについて説明。大阪府健康医療部長の藤井睦子氏は、大阪府が令和元年から運営している府民向けの健康アプリ「アスマイル」を紹介した。



On-line Symposium

オンライン・シンポジウム

「まさかの時のID連携～命を守る健康・医療データを活かすために」

主催 関西健康・医療創生会議
NPO法人「関西健康・医療学術連絡会」
共催 関西医薬品協会
後援 関西経済連合会
日時 2022年3月25日(金) 13:00～15:30
聴講者 約200人

PROGRAM

- 問題提起：「災害時に活用できる健康・医療データ基盤の創出に向けて」
黒田知宏／京都大学大学院医学研究科教授、同大学医学部附属病院教授
- 特別講演：「広域救急・災害現場における医療の課題」
松岡由典／神戸市立医療センター中央市民病院救急科副医長(当時)
- 特別講演：「学術認証フェデレーション『学認』～学術を中心とした国内外におけるID連携の取り組み～」
中村素典／京都大学情報環境機構教授
- 一般講演：「先進事例に学ぶトラストアンカーの実際」
岡大蔵／吹田市健康医療審議監、藤井睦子／大阪府健康医療部長



シンポジウムの成果と今後の研究課題

我が国では、個人の医療情報について極めて慎重な取り扱いが医療現場で見られるだけでなく、医療情報自体も様々な医療機関等に分散し、各施設内に格納されて共有できない状況にあり、二次的な利活用はおろか、患者の診療行為であっても支障をきたしており、患者側、医療機関側双方に不利益をもたらしている。

このことは災害時や平時の救急という「まさかの時」にあっても同様であり、この度のシンポジウム及び自治体等へのヒヤリングを通じて得られた知見は、以下の通り。

- ① 将来の地域医療ネットワークを実現する上でも、まず医療現場に山積する課題をDXで具体的に解決することが最も重要
- ② なかでも、災害時や救急時での医師どうし(D2D)の情報共有を実現することは、医療機関、自治体、関連業界、

住民などの理解が得やすく、ユースケースとして取り組みやすい

- ③ 医療情報を共有する際には、様々な主体が保有するデータを一箇所に集めるのではなく、学認フェデーションのようなID連携の仕組みを自治体が関与した形で構築することが有効

こうした知見を踏まえ、関西健康・医療創生会議では、本年度、医療情報利活用研究会をNPO法人「関西健康・医療学術連絡会」に設置し、救急をはじめとする医療現場の課題の抽出と分析、DXによる解決方策の調査研究を開始した。

研究会については継続開催する予定で、今後、アカデミアや自治体、産業界の幅広い参加を期待しており、その研究経過について、新たなシンポジウムとして公開することも検討している。

NPO法人

「関西健康・医療学術連絡会」の活動をご支援ください

▶ 賛助会員ご入会のお願い

NPO法人「関西健康・医療学術連絡会」は、関西健康・医療創生会議の目的を達成すべく、学術・研究機関と産業界をつなぐ「かけはし」として、平成28年2月に発足しました。学術連絡会は、創生会議を構成する大学および研究機関との連絡調整、ならびに創生会議の展開する諸事業の実施・運営を担います。

しかしながら、学術連絡会の活動は、賛助会員とご参画いただいている企業・団体のみなさまの会費とボランティアによって支えられています。学術連絡会ひいては創生会議の活動は、健康長寿社会を達成できる「新たな産業の創造」と、安心して健康に暮らせる「持続可能性のあるまちづくり」に寄与することをご理解いただき、さらなるご支援をくださいますようお願い申し上げます。

●会費／年額一口 100,000円

※入会の申し込み方法など、詳しくは
学術連絡会ホームページ

<http://www.khma.jp/>

をご覧ください。

▶ 賛助会員のご紹介

創生会議の趣旨に賛同し、賛助会員として、創生会議ならびに学術連絡会の活動をご支援くださっている団体・企業のみなさまをご紹介します。

(2022年4月1日現在、五十音順)

- 小野薬品工業株式会社
- 川崎重工業株式会社
- 関西医薬品協会
- 関西経済連合会
- GEヘルスケア株式会社
- 塩野義製薬株式会社
- シスメックス株式会社
- 株式会社島津製作所
- 武田薬品工業株式会社
- 田辺三菱製薬株式会社
- 日本新薬株式会社
- 阪急電鉄株式会社

▶ 役員一覧

理事長	橋本 信夫	神戸市民病院機構 理事長
理事	湊 長博	京都大学 総長
	金田 安史	大阪大学 理事・副学長
	藤澤 正人	神戸大学 学長
	上本 伸二	滋賀医科大学 学長
	原田 省	鳥取大学 副学長・医学部附属病院長
	松本 俊夫	徳島大学 名誉教授 藤井節郎記念医科学センター顧問
	塩崎 一裕	奈良先端科学技術大学院大学 学長
	竹中 洋	京都府立医科大学 学長
	河田 則文	大阪公立大学 医学研究科長兼医学部長
	細井 裕司	奈良県立医科大学 理事長・学長
	伊東 秀文	和歌山県立医科大学 医学部長
	松村 到	近畿大学 医学部長
	佐野 浩一	大阪医科薬科大学 学長
	友田 幸一	関西医科大学 学長
	野口 光一	兵庫医科大学 学長
	竹村 彰通	滋賀大学 学長
	太田 勲	兵庫県立大学 学長
	大津 欣也	国立循環器病研究センター 理事長
	渡邊 恭良	理化学研究所 生命機能科学研究センター 健康・病態科学研究チームリーダー
	谷藤 道久	田辺三菱製薬株式会社 執行役員
	手代木 功	塩野義製薬株式会社 代表取締役会長兼社長
	服部 重彦	株式会社島津製作所 相談役
	家次 恒	シスメックス株式会社 代表取締役会長兼社長
監事	土屋 裕弘	京都大学イノベーションキャピタル株式会社 取締役
事務局長	中村 泰三	
事務局次長	落合 正晴	
事務局	藤野 恵	田畑 睦美

(2022年10月1日現在)

あとがきにかえて

「かけはし」と改称して第2号目、安藤忠雄先生と橋本理事長との対談が実現しました。分野を超えて縦横に展開する話の翼に乗って、私たち聞き手側も、共に知的冒険の旅をすることができました。お忙しい時間を割いてご協力いただきました安藤先生に改めて御礼申し上げます。

COVID-19の命名からもうすぐ3年、さまざまな側面で社会のあり方が変わりました。そしてポストコロナ社会の健康・医療の課題とは。私たちは引き続き産学官連携のかけはしとして、その問いに向き合ってまいります。変わらぬお力添えをお願い申し上げます。(M)

関西健康・医療学術連絡会 News Letter Vol.08 かけはし

- 発行日／2022年10月20日
- 発行／NPO法人「関西健康・医療学術連絡会」事務局
〒606-0001 京都市左京区岩倉大鷲町422番地
公益財団法人 国立京都国際会館内659号室
TEL・FAX:075-705-2496
URL: www.khma.jp E-mail: gaku-renrakukai@nifty.com
- 編集協力／前田 武、樹井 耕一郎